紙ヒコーキ

神内　恵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紙ヒコーキ

【Ｎコード】
Ｎ４７２８Ｆ

【作者名】
神内　恵

【あらすじ】
退屈な毎日。友達関係に悩む加奈。そんなある日、理科実験室でその人と出会った。退屈な毎日が変わり始める。

あーあ、なんかだるい。数学なんてやってらんない。

高2ともなれば受験のことも視野に入れてきて、先生もクラスの皆も少しピリピリしてくる。

学校なんて退屈。
おもしろくもないことで笑って、空気読んで、将来使うのかもわからないこと勉強して。

早く帰りたい。

私の席は一番窓側。グラウンドは誰も使ってないから、人間観察という唯一の暇つぶしもできない。

澄んだ空を白い雲が流れていく。

「加奈ってさ、ハンバーガーのキッズセットのおまけみたいだよね。いつもあたしらにくっ付いてきてさ、話し合わせたり同じもの買ったりして。」

この前ずっと一応は友達だと思ってた人達に言われた言葉。

私がおまけの玩具ならあんたはポテトか！それともジュースか！

そう言ってやればよかった。

いじめられてたわけじゃない。
いつもと同じようにしてたつもり。

別について行きたくてついて行ってるんじゃない。
別に話し合わせたくて合わせてるんじゃない。
別に同じもの買いたくて買ったわけじゃない。

ただ、普通に平穏に高校生活を送れるようにしたかった。それだけなのに。

もう嫌だ。もう疲れた。もうやめちゃおうか、何もかも。

ふと視線を落とすと視界の隅で何か動いた。

何だろう？

グラウンドを挟んだ向こうにある第一校舎、その2階あたりに白いものがふよふよと飛んでいる。

蝶？・・・にしては少し大きい。何だろう？

あそこは確か、理科実験室。今はあまり使われてないはずなのに。

授業が終わり、理科実験室へと急いだ。
あの白い何かが消えてしまう前に、あそこに辿り着かないと。小さい頃のように心が踊っている。

ガラガラッ

・・・別に何も変わらない理科実験室。

そうだ。理科実験準備室はどうだろう。隣にある少し小さな、実験道具を置いておく部屋。

窓を開けてみる。が、あの白い何かは見当たらない。

消えちゃった・・・のかな。それとも見間違い・・・？

何かが変わると思ったのに。

戻りたく、ないな。次の授業、サボろう。

机に座る。窓からの風は少し冷たい。さっきまで忘れてた感情が再び沸き起こる。

でも今度は少し違う、なんだか悲しい感情。

昔はもっと、自分が好きなように友達と接していたのに。

深く考えないで、自分がしたいことをしたいようにして、自分がしてもらいたいことを友達にもしてあげてた。

楽しい時は思いっきり笑って、周りを気にしたりはしなかった。

なのに、今はどうしてそれができないんだろう。自分を作って、想いを殺して。

こんな自分、嫌だ。

頬を涙がつたう。

「なんで泣いてんの。」

声のした方へ振り向く。

実験室と準備室をつなぐドアに男の子が立っている。手には白いクシャクシャになった紙。

上靴を見ると緑のラインが入っている。ということは、3年生。

なんで3年生がこんなところに・・・。授業はもう始ってるはずなのに。

「3年生が授業サボってていいんですか？」

急いで涙を拭きながら聞く。

「いいの、いいの。あんなとこで勉強してたら息が詰まるから、気晴らし。それよりさ、なんで泣いてたの？」

そう言いながらその人は隣に座った。

言いたくない、けど誰かに聞いてもらいたい。自分でもよくわから

ない気持ち。

「あの、友達って思ってる人からハンバーガーのキッズセットのおまけみたいって言われたらどう思いますか？」

「何それ。おもしろいね。」

なんだか、あまり楽しくなさそうにその人は笑った。

「それって、どんなふうに言われたの？」

「悪い意味で、です。」

「ふーん、でも別にいいんじゃない？おまけ。」

「どこがですか。他のポテトやハンバーガーは単品でも売ってあるし、主要メンバーなのに、おまけは単なるおまけで単品じゃ買えない。それにコロコロ商品が変わる。」

「だからこそでしょ。そのキッズセットを買わないと貰えない。コロコロ変わるから、欲しければその期間内にキッズセットを買わなきゃ手に入らない。それってすごく貴重じゃない？」

「そんなもんでしょうか・・・。」

「それに、そのおまけ目当てにキッズセット買う人だってたくさんいる。ってか、おまけがメインみたいなもんだよ。おまけは一つの

楽しみでもあるし、今となってはおまけあってのキッズセットだろ。」

その人は手に持ってたクシャクシャの白い紙を広げる。

たくさん折り目がついてる。それをもう一度、その人は折っていく。

「考え方次第でさ、変るんだよ。自分が想いたいように受け止めればいいんだよ。」

自分が想いたいように。昔みたいに。

「見てて。」

腕を上げ、その白い紙を窓の外へ飛ばす。それは風にのって、空を泳いでいく。

「紙ヒコーキ。」

「そう。いろいろさ、もやもやしてるものをこれに乗せて飛ばすんだ。ま、落ちたのは後で取りに行くんだけどね。」

そうか。私が見た白い“何か”は、紙飛行機だったんだ。

「受け止められる余裕ができれば、それを拾いに行けばいい。」

「私も、飛ばしていい？」

「もちろん。いっぱい、飛ばせばいい。気が済むまで。」

いろんな形の紙飛行機を作った。
中にはすぐ落ちていったり、ものすごいスピードで飛んでいったり、遠くへ遠くへ飛んでいくものもあった。

いっぱいいっぱい飛ばした。なんだか心がずいぶん軽くなった。

また飛ばしに来よう。それもたくさん。そして拾いに行こう。その時は、この人も一緒だといいな。

そういえば、名前聞いてない。

「あの、良ければ名前教えてください。」

「あ、そういや言ってなかったね。俺、広瀬知希。ちなみに3年8組。」

「私は2年6組の遠山加奈です。」

「また、来るよね。」

「はい。」

退屈な日々が変わり始める――――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4728f/

紙ヒコーキ

2011年1月22日03時03分発行